

# ハワイ人とキリスト教の過去と現在

## あるハワイ人運動家の改宗の物語

1994年1月12日の *Honolulu Weekly* 誌に“Trask on Trask”と題した記事が載った。王朝崩壊100周年から1年が経ち、ハワイ人の主権回復運動が今後どのように展開していくのかについて、ハワイ人運動家のミリラニ・トラスクにインタビューしたものである。州当局やOHA (the Office of Hawaiian Affairs) と各民間団体との政治的関係を伺い知ることができ、興味深い。しかし、最も私の目を引いたのは、インタビュアーの以下の質問に対するトラスクの回答であった。

ハワイ人の運動にとって、一つの大きな問題は、宗教に関するものです。多くのハワイ人は保守的なキリスト教徒です。一方、キリスト教はこの地において多くの害悪をなしてきたと糾弾し、伝統的儀礼行為に戻っていくハワイ人もいます。このことは、(運動内に) 重大な軋轢を起こすのではないですか？

この質問に対し、彼女は、彼女が首長を務めるKa Lahui Hawai'iの憲法において、イエスやエホバやペレなどの特定の神の名は用いられず、包括的名称の「アクア」が用いられていると答え、自分の信仰歴について次のように語ったのである。

私はカトリックの家庭に生まれ、カトリックとして育てられ、カトリックの学校に通いました。私はキリスト教を拒絶しません。それは私のハオレの血の宗教的伝統ですから。私は、中国人のクォーターで、家族の中に仏教徒のオハナがいることを誇りに思っています。私の両親が離婚した時、私はカトリックの教会を去り、その後の長い年月、チベット仏教を実践していました。そして今から5年前に伝統的儀礼行為、アヴァ儀式やその他の儀礼を学び始めました。ですから、私は伝統宗教の実践者でもあるのです。最終的に、ハラヴァの地で私の心を捉えたのが、それ(伝統宗教)だったのです。

この後、彼女は、主権における第一の原理はアクアへの不変の信仰であり、スピリチュアルな行為にしっかりと根を下ろしていることがハワイ人にとって重要であると指摘する。そして、州当局のオファーを受け入れた他の民間団体を暗に非難しつつ、神との約束に照らして正直であることが運動の指導者には求められ、スピリチュアルな面で破綻した国家は立ち行かないと主張したのだった。主権回復運動とキリスト教の問題については正面から答えず、逆にその質問に関連づけて自らの団体の正当性を主張する彼女の話術は巧みである。だが、彼女の語りにおいても「血」がカウントされていること、彼女の伝統宗教への回帰が主権回復運動の興隆と軌を一にしていることには注意を払って良いだろう。

先の質問を読み替えれば、ネイティブの伝統的な価値観を前面に押し立てて運動を展開するのであれば、キリスト教徒であっては都合が悪いのではないかという問いになるだろう。また、当時、ネイティブの政治的エリートは伝統文化から最も遠い所にいる人間であるという指摘が、文化政治学的な論争を巻き起こしていた。トラスクの改宗の物語は、それらの指摘が全く的外れなものではないことを示している。自らの信仰歴を包み隠さず述べるのは運動家として迂闊なように見えたが、彼女は運動の指導者として正直であろうとしたのかもしれない。

## ハワイ人とキリスト教

私の学位論文の目的は、ハワイ人のキリスト教のあり方を過去と現在において考えることであった。19世紀のハワイについては、多くの英字新聞やハワイ語新聞から、会衆派教会の年報や機関誌、その他の出版物まで、実に豊富な史料が残されている。膨大なマイクロフィッシュやマイクロフィルムの中から見つけ出したほんの一握りの資料を用いて、私は19世紀のハワイ人とキリスト教についての考察を試みた。一方、現在(20世紀末)のハワイ人とキリスト教については、ハワイ人学生にアンケートを取ったり、ハワイ人牧師や信徒にインタビューを行ったりして、その有り様を理解しようとした。

ところで、今、10年以上も前にハードディスクに保存したテキストファイルのメモを浦島太郎のように開いてみると、自分が棚上げしたまま、すっかり忘れていた問題に出くわす。当時、私は、史料調査で得た「19世紀のハワイ人」という存在と私と同時代を生きる「20世紀末のハワイ人」という存在との間にギャップを感じ、少し苛立っていたようだ。大学院のゼミで、宣教師の残した島民についての記述に対し、「自分たちの祖先がこのように見られていたのかと思うと、怒りにもまして悲しみを感じる」と、あるハワイ人学生が静かに意見を述べていたことがある。彼女にとって、未開の野蛮人として描かれた19世紀前半のハワイ人と彼女自身は確実に繋がっていた。だが、私とは言えば、彼女と彼らは本当に繋がっているのかということを考えずにはいられなかったのだ。

19世紀のハワイ人と現在のハワイ人との連続性を考える時、20世紀前半は非常に重要な時代となってくる。その時代のハワイ人のキリスト教についての考察は、学位論文でやり残した宿題であり、この連載でも触れることができなかつた。しかし、仮にそれができたとしても過去と現在のギャップが完全に埋まるわけでもなさそうだ。古いものを継承しつつ新たなものを取り込んで自ら変容していく「文化」という概念は、そのギャップを少しは埋めてくれるかもしれない。文化の変容にとって重大な時代があり、その時代を経てどのように今の文化があるのかを考察することは歴史人類学が取り組むべき課題でもある。ただ、当時の私には、過去と現在の間のギャップの問題は別の所にあるように思われた。

過去のハワイ人と現在のハワイ人とのギャップは、ネイティブとキリスト教の今日的な意味を考える時にも避けては通れない問題だ。トラスクの改宗の物語が示すように、現在のハワイ人は、もはや過去のハワイ人とは同じではない。19世のハワイ人のキリスト教を考察する際に用いられた「ネイティブ」対「外来宗教」という枠組みの中では、現在のハワイ人とキリスト教の関係を捉えることはできないのである。この連載の目的であった過去から現在に至るハワイ人とキリスト教の関係を辿るという作業は終わっていない。また、過去と現在の民族誌学的解釈におけるテキスト性の問題、主権概念のネイティブ・ポリティックスからの解放など、検討しなければならない課題は多い。だが、残念ながら、この連載に与えられた3年間という期間を使い果たしてしまった。それらの課題を整理する紙幅もないようだ。別の機会に、別の場所で、この話の続きを始めたいと思う。